

令和 4 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K21624

研究課題名(和文) 消滅危機言語であるタロコ語の世代間対話コーパスの構築と談話研究

研究課題名(英文) Construction of an intergenerational dialogue corpus and discourse study of Taroko, a language in danger of extinction

研究代表者

小泉 政利 (Koizumi, Masatoshi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：10275597

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、タロコ語(オーストロネシア語族、台湾)の対話の動画付きコーパスを作成して一般公開し、そのデータを用いて談話文法の研究を行うことである。課題申請時の計画では、研究代表者自らが大学院生等の研究協力者をともなって台湾現地を訪れ、タロコ語話者を対象に独話と対話をビデオカメラで録画し、録画データをもとにコーパスを作成し、談話文法の研究を行う予定であった。

しかし、コロナ禍の影響で日本から台湾現地に行くことができなかった。そこで現地協力者に依頼して、CHILDESに準拠した動画付きコーパスを作成するための独話ならびに対話の撮影を行った。また、それを文字に書き起こす作業を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

タロコ語は若い世代に継承されなくなりつつある危機言語であるため、今すぐに記録や研究を行わなければ永遠にその機会が失われてしまう可能性が高い。流暢な母語話者が残っている現時点で、異なる世代の対話の記録を残しておくことは、タロコ族の言語と文化の継承において非常に重要な意味を持つ。また、タロコ語はVOSを基本語順とする能格言語であり対称態をもつなど、言語類型論的に極めて珍しい。それを記録に残し談話文法の研究を行うことは、学術的にも社会的にも極めて重要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to create a corpus of Taroko (Austronesian, Taiwanese) dialogues with video clips, make it available to the public, and use the data to conduct research on discourse grammar. The plan at the time of the proposal submission was for the PI, accompanied by graduate students and other research collaborators, to visit Taiwan, record spoken dialogues with Taroko speakers, and create a corpus based on the recorded data to conduct research on discourse grammar.

However, with the spread of COVID-19, it was no longer possible to go to Taiwan from Japan. We asked a local collaborator to film the speeches and dialogues in order to create a corpus with video clips based on CHILDES. We also proceeded to transcribe them into writing.

研究分野：言語学

キーワード：オーストロネシア語族 タロコ語 危機言語 対称態 談話研究 コーパス

1. 研究開始当初の背景

タロコ語は若い世代に継承されなくなりつつある危機言語であるため、今すぐに記録や研究を行わなければ永遠にその機会が失われてしまう可能性が高い。流暢な母語話者が残っている現時点で、異なる世代の対話の記録を残しておくことは、タロコ族の言語と文化の継承において非常に重要な意味を持つ。また、タロコ語は VOS を基本語順とする能格言語であり対称態をもつなど、言語類型論的に極めて珍しい。それを記録に残し研究を行うことは、学術的にも社会的にも極めて重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、タロコ語(オーストロネシア語族、台湾)の異なる世代の話者の対話をビデオカメラで撮影し、動画・音声付きコーパスを作成して、後世に残せる形で一般公開し、そのデータを用いて談話文法の研究を行うことである。以下の二分野での貢献を図る。

危機言語の記録： タロコ語(セディック語タロコ方言)は台湾先住民言語の一つで、主に花蓮県在住のタロコ族約 2 万人によって話されている。話者数が少ないうえに、そのほとんどが台湾の公用語である中国語(国語)とのバイリンガルである。その影響で、話者数の減少や使用場面の減少など、消滅が危惧される「危機言語」の特徴が顕著に見られる(Krauss 2007; Moseley (ed.) 2010)。近年、タロコ語に再び活力を呼び戻そうとする復興の機運が高まっているものの、既に流暢な話者は 60 代以上の高齢者に限られ、若い世代のタロコ語には様々な点で変化と摩耗 (attrition) がみられる (Tang 2011)。この観点から、まだ流暢な母語話者が残っている現時点で、異なる世代のタロコ語の記録を残しておくことは、学術的に価値があるだけでなく、タロコ族の言語と文化の継承においても非常に重要な意義を持つ。

談話文法理論： タロコ語は、(i) VOS (動詞・目的語・主語) を基本語順とし、(ii) 他動詞の主語が(他動詞の目的語や自動詞の主語とは異なる)特別な格を受ける能格言語であり、(iii) 日本語や英語などの言語の能動態と受動態に相当する構文が形態的に対等な関係にある対称態 (symmetrical voice) をもつなど、言語類型論的に極めて珍しい文法上の特徴を有する(月田 2009)。文章や会話の中でどのような条件で態や語順の異なる文(構文)が使分けられるのかに関する談話文法のこれまでの研究には、このような特徴を持った言語のデータを扱ったものはほとんどない。本研究は、構築したコーパスを用いて、対称態型 VOS 能格言語における構文選択が、それ以外のタイプの言語における構文選択とどのような点で共通しどのような点で異なるのかを明らかにし、談話文法理論の発展に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者と海外研究協力者が連携して実施する国際共同研究プロジェクトである。研究代表者はコーパス作成や言語理論に関する知見に基づき、研究全体の目的とデザインを決める。海外研究協力者はタロコ語の母語話者である点を活かして、現地の他の協力者との交渉など現地での研究活動のコーディネートと、作成されたデータファイルの言語情報の内容確認を担当する。タロコ語のコーディング手法の開発、データの管理・分析、論文執筆等は共同で行う。

データ収集方法： タロコ語が流暢な 60 代以上の母語話者 10 名程度(高年齢群)とそれより若い 30 代・40 代のタロコ語話者 10 名程度(低年齢群)を対象に、(i) 高年齢群の話者同士の対話、(ii) 低年齢群の話者同士の対話、ならびに (iii) 高年齢群の話者と低年齢群の話者との対話を、1 回につき 30 分、合計 150 時間(各条件 50 時間ずつ)、ビデオカメラで録画する。

収集データの処理・保存・公開の方法： 録画データをもとに、(i) 発話(タロコ語表記)、(ii) 形態素レベルの区分け、(iii) 文単位の英語の訳、の情報が含まれたデータファイルを CHAT (Codes for Human Analysis of Transcripts) 形式で作成する。CHAT は CHILDES (Child Language Data Exchange System: <https://childes.talkbank.org/>) で使われている標準形式で、CLAN (Computerized Language Analysis) プログラムを用いて処理する。プロジェクトの早い段階で現地協力者を対象に CHAT や CLAN を使った言語データ処理技術に関する講習会を行い、その後は録画データが提出されるごとに現地で作業が進められるように体制を整え、作成されたデータファイルの内容を研究者が確認するという手順でプロジェクトを進める。作成したデータファイルは CHILDES で半永久的に保存しインターネット上で一般公開する。

現地協力者の研修： 発話データの基本的な処理にはタロコ語話者による作業が必須であるた

め、海外研究協力者の所属する国立東華大学（台湾）と連携し、学生の協力を得ると共に、言語データ処理技術に関する講習会を行って協力先の機関に対して教育面での貢献を図る。本研究プロジェクトの進捗と現地での教育効果の両面で相乗効果が期待される。

収集データを使った研究： 作成したコーパスは将来的に様々な目的に使用できるが、本研究期間内では、収集した発話データを分析することによって、対称態型 VOS 能格言語であるタロコ語における談話内での構文選択の法則を明らかにし、日本語や英語などを対象とした先行研究に基づいて構築された仮説がこのタイプの言語にも適用され得るかを検証する。

4. 研究成果

コロナ禍の影響で日本から台湾現地に行くことができなかった。そこで現地協力者に依頼して、CHILDES に準拠した動画付きコーパスを作成するための独話ならびに対話の撮影を行った。また、それを文字に書き起こす作業を進めた。談話文法を研究する段階にまでは進めなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	里 麻奈美 (Sato Manami) (80723965)	沖縄国際大学・総合文化学部・教授 (38001)	
連携研究者	木山 幸子 (Kiyama Sachiko) (10612509)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域(台湾)	国立東華大学			